様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年３月３１日現在

機関番号：１６１０１
研究種目：基盤研究(B)(海外)
研究期間：2009～2012
課題番号：２２４０２０３７

研究課題名（和文）アジアにおける国際労働移動の成否を規定する要因についての調査

研究課題名（英文）Factors Determining the Success of Labor Migration in Asia

研究代表者
上野　加代子（UENO　KAYOKO）
徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授
研究者番号：５０２１３３７７

研究成果の概要（和文）：国際労働移動の規定要因の調査として、本研究では主に、①帰国した中国人男女の元技能研修生・実習生、②アジアの就労先から帰国したフィリピン人女性の元家事労働者、③そしてシンガポールで建設労働者として働く中国・バングラデシュ・インド出身の男性労働者に対して、それぞれ質問紙調査とインタビューを実施した。結果は、①中国に持ち帰った金額は、1年の研修では100万円程度、3年の研修・実習では300万から400万円であり、若く、学歴も比較的高いものより、年齢的には高く、学歴は中学校程度で、子どもがある人の方が、成功と答える割合が高い。②フィリピンからの家事労働者の就労の成果については、次期や家族状況よりも、就労国によって強く規定されていることがわかった。シンガポールより台湾と香港で就労したほうが、収入や、就労国での生活経験の自己評価がポジティブであった。③就労先の住環境が、男性外国人労働者の生活の質にとって重要であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
This study largely consists of three sets of quantitative and qualitative researches with an aim to explore the factors determining the success of labor migration in Asia. They are conducted to (1) Chinese ex trainees and interns from Japan, (2) Filipino ex domestic workers from other parts of Asia, and (3) male workers from China, Bangladeshi, and India working in Singapore construction site. Results shown vary from one research to another. Main findings for respective research are that (1) Chinese ex workers show overall positive evaluation on working in Japan, especially among those who are relatively old and non-college graduates; (2) destination countries strongly determine the evaluation of their working experiences among Filipino ex-domestic workers; (3) living condition in working country turned out to be an important factor to regulate the life condition of male construction worker from China, Bangladeshi, and India.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2011年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2012年度	2,600,000	780,000	3,380,000
総　計	10,200,000	3,060,000	13,260,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：国際労働移動　シンガポール　建設労働者　フィリピン　家事・ケア労働者　技能実習生　中国

１．研究開始当初の背景

過去数十年の移民のめまぐるしい拡大現象は、Castles と Miller によって「移民の時代」と呼ばれている。アジアにおける「移民の時代」は、次の二つの特徴をもっている。第一に、アジア地域からアジア以外の地域というよりアジア圏内の移動が大勢であり、第二にアジアは「移動の女性化 feminization of labor migration」が顕著な地域である。

アジア圏内での移動という点において、アジアで経済発展を遂げた諸国がどの国から労働者を入国させているかをみると、外国人労働者の割合が非常に高いシンガポールは、インドネシア、フィリピン、バングラディシュ、スリランカ、中国などから、台湾やマレーシアもまたインドネシア、ベトナム、フィリピンなどの労働者が圧倒的な割合をしめている、そして日本の実質的な短期外国人労働受け入れ政策（研修生・実習生プログラム）においても、中国やベトナムなどのアジア隣国の出身者が圧倒的多数である。

他方、移動の女性化として着目されてきたのは、女性が単身で海外に渡る現象で、アジア以外の国々では、就労するのは高い技能をもった女性だという傾向があるのに対して、アジアでは低社会階層出身の女性の労働力移動が顕著である。フィリピン、インドネシア、スリランカでは労働者の海外移動の60-80%を女性が占めており、彼女たちの多くが家事やケアに携わる家庭内労働者として主にアジア地域で雇用されていることはよく知られている事実である。

これらの労働移動にはコストが伴うとされている。海外で就労する家庭内労働者には既婚者も多く、自分の仕送りで族の生活費や子どもの教育費を捻出し、子どもの世話を親族や近所のひとに依頼したり、子どもを学校の寮に入所させる。Parreñas のフィリピン調査では、女性が海外就労した場合、子どもの日常的な世話は父親よりも女性親族に委ねられる傾向がみられた。母親は遠隔地から子どもたちに対してお金、愛情や気配りを提供するが、フィリピン社会の性役割分業意識から、家計維持は夫の役割で自分の海外就労は強いられた選択だと捉え、子どもたちも自分が母親から捨てられたと解釈する。

この研究に代表されるように、これまでの女性の労働移動のコスト研究は、ケア・ドレインなどの枠組みで既婚女性の労働移動が子どもに与える影響という点で限定的なものであったといえよう。そして男性の外国人労働者については、医師などの頭脳流出が地域医療に及ぼす影響を中心に議論されており、建設や工場労働者の移動による利益とコストの研究はあまりなされていない。近年の非熟練労働移動の研究が「移動の女性化」現象に着目し、ジェンダー論やグローバル経済論などの枠組から女性労働移民について活発な議論をしてきた一方で、男性労働移民とその生活についての関心は後退したように思う。いずれにしても、女性の家事やケア労働者、男性の高度技術者の移動の先行研究は、移動が経済的な利益をもたらすことが前提とされてきた。

しかし、本当にそうであろうか。本研究では、個々人のレベルで労働移動のバランスシートを明らかにする。移動の利益は経済的な側面（仲介費用を差し引いたトータルの総収入）を指標にするが、これは、非熟練労働者の場合、期待される経済的利益がもっとも決定的な出稼ぎの誘因になっているからである。他方、コストについては、利益と合わせ鏡の経済的損失、ならびにそれ以外の主観的なコストを拾い出していく。そのうえで、なにが労働移動の成否を分けることになるのかを、エージェンシーをはじめとする出身国と就労国でのネットワーク、本人の言語習得能力、送り出し国と受け入れ国の労働移動政策から明らかにする。また本研究では、この移動の成否という点で、無視できない構造的要因として 2008 年秋以降の経済危機の影響をみていく。申請者は、これまでアジアの外国人女性家庭内家事・ケア労働者について調査を実施してきたが、経済危機の影響をうけた「移動の失敗」は男性により多いとの仮説をもっている。アジアの多くの出身国において家庭内労働者は借金なし（給与天引き）で外国に赴き、その雇用も社会の経済状況に大きくは左右されない。他方、エージェンシー料金を借金して支払わされることから、外国の就労先での解雇やリストラに起因する労働移動のコストは男性により多い。つまり、労働移動の成否は移動ビジネスのあり方などから出国前から説明される部分が多く、本研究ではこの出身国から就労国への一連の流れにおける規定要因を調査で明らかにしていく。そして移動が、一個人の選択や決定というより、より良い生活のための家族戦略の側面が強いことを考え合わせると、移民の成否は自国の家族やさらには出身地域に大きな影響を及ぼすことが予想されることから、本研究ではその影響の範囲もみていく。また労働移動の失敗は、日本における外国人研修生・実習生においても広く認められるのではないか。借金返済に要する長い期間と（２年以上）短い研修・実習期間（最大３年）という構造的問題に加えて、研修生・実習生を多く雇用している従業員 50 人未満（とく

に近年増加している 20 人未満）の企業において、経済危機が約 20 万人の研修生・実習生の労働条件や待遇、そして家族に及ぼす影響を緊急に明らかにしたい。

２．研究の目的

本研究では主に労働力移動の利益とコストを調査から明らかにする。労働移動が出国者や家族や地域にもたらす利益については送金額（政府の発表と暗数の推定）などから特定されやすいが、とくにコストについては、個人や家族への具体的な調査研究を通してのみ把握可能である。本研究では、移動の成果はすでに出国前から大きく決定されているとの仮説から、アジアの主な労働者輸出国である、フィリピン、インドネシア、バングラディシュ、中国からの非熟練労働者ならびにその家族に質問表とインタビュー調査を実施する。具体的にどのような要因（エージェンシーをはじめとする出身国と就労国でのネットワーク、本人の言語習得能力、送り出し国と受け入れ国の労働移動政策）が労働移動の成否を分けるのかを分析し、国際労働移動の時代の政策提言の資料としたい。

本研究は、これまで送り出し国と受け入れ国という二国関係で捉えられがちの移動の利益とコストをリージョンの視点を組み入れる。短期非熟練労働者において出稼ぎ先は一国ではなくアジアのリージョンが選択肢になっている。就労国日本という点では、日系人労働者に対しては全般的に研究が多くなされてきたが、日本の労働市場の最底辺を支える研修生・実習生についてはNGO報告が主で、学術的な調査はなされていないのが現状である。

本研究では、労働移動の利益とコストを個人や出身国の家族への影響から検討し、移動の成果はすでに出国前から大きく決定されているとの仮説を検証する。就労国の問題だけが取り上げられやすいが、実際は、移動の成否はどのような移動ネットワークに入るかが大きな規定要因になるという結果が予想される。

３．研究の方法

国際労働移動の規定要因を探る調査として、本研究の軸になる調査として、２０１０年度、２０１１年度、２０１２年度質問紙調査とインタビュー調査、シンガポールとフィリピンにおいては外国人労働者とその家族や斡旋業者に関するフィールドワークを実施した。

（１）日本から帰国した中国人男女の技能実習生

「日本への研修生・実習生」に着目し、国際労働移動の成否を規定する要因をみていく。これについては一部の事例がセンセーショナルに報道されたことで注目を集めたが、中国調査の困難さを反映してか、これまで客観的・学術的なデータはないに等しい。「日本への研修生・実習生」を対象に調査を実施し、その実態を把握するとともに、成否を規定する要因として、金銭的なコストと稼得金額、および家族関係への影響などをみていく。

量的調査と質的調査を併用して、対象者の生活実態、労働移動の影響等について調査を行った。対象は「日本への研修生・実習生」であるが、本調査が現在進行中の研修生・実習生に及ぼす影響を考え、すでに修了した帰国者を対象とした。無作為抽出は困難であるが、帰国者名簿にアプローチできる送り出し業者を通じてその名簿の限りで 80 名の悉皆調査とするなどの工夫をして、代表性の確保につとめた。

（２）シンガポール・台湾・香港から帰国したフィリピン人女性の元家事労働者 400 名にインタビューにもとづく質問紙調査を実施した。そして、これまでの海外就労経験を就労国別に聞き取ることで、労働移動のトラジェクトリーを明らかにするとともに、労働移動が残された家族などに及ぼした影響などについての項目も加えた。

（３）シンガポールで建設労働者として働く中国・バングラデシュ・インド出身の男性労働者に対して、それぞれ質問紙調査を実施した。有効回答は、289 票である。

４．研究成果

質問票調査の結果は次の通りである。

（１）比較的若い未婚者が多いが、小さな子どもをおいての参加した女性も少なくない。多くは 20,000 元程度の費用を支払って来日している。持ち帰った金額は、当然期間によって異なるが､1 年の研修では 100 万円程度、3 年の研修・実習では 300 万から 400 万円を持ち帰っている。また、もう一度参加できるよう制度を変更してほしいという意見が多かったことからも、中国人調査対象者はおおむね、日本での研修・実習を成功と評価している。属性やその他の要素と成否との関係をみると、若く、学歴も比較的高いものより、年齢的には高く、学歴は中学校程度で、子どもがある人の方が、成功と答える割合が高い。留守家族や子どもは困難要因とはなっていない。経済面からみると、今回の調査に見る限り、必ずしも持ち帰った額と成否の評価は関連せず、金額よりも送り出しおよび受け入れ業者、受け入れ先の企業（農家である場合などはその農家）の対応等が成否の評価に影響しているものと思われる。

（２）フィリピンからの家事労働者の就労の成果については、次期や家族状況ではなく、就労国によって規定されていることがわかった。シンガポールより台湾と香港で就労したほうが、収入や、就労国でのトータルな生

活経験（休日、就労条件、貯金額、エージェンとの関係）についての自己評価がポジティブであった。その意味で、海外就労の結果は、行く前に就労先を選ぶ時点である程度決まっているということができるだろう。そして就労先の決定には女性が支払うエージェンシの費用が大きく関係していた。また、残された子どもの世話は、米国や EU に女性が出国する場合の Parreñas のフィリピン調査と異なり、女性が海外就労した場合、子どもの日常的な世話は父親に委ねられる傾向が強かった。

（３）男性労働者は住み込みの家事・介護労働者よりも賃金は高いが、斡旋業者の費用が高いだけでなく、回答者の半分がダニ問題ゆえにマットレスで寝ることに拒否感があり、3分の1が工事中の現場の仮設が住居であり、3 分の 1 が盗難被害の経験があるなど生活環境が極めて良くない。住環境については就労前に渡航者によって予測されにくいが、雇用者によって確実に改善される要因である。この中国人労働者調査は、折しもシンガポールで２０１２年に中国からの男性労働者のストライキが実施され、移住労働者の待遇問題が社会的にクローズアップされているなか、タイムリーな調査であったと思われる。

なお、質的なフィールドワークとしては、シンガポールで働く外国人労働者の社会関係資本に焦点をあてて参与観察した結果、外国人家事労働者の恋人を含むソーシャル・ネットワークの形成と、インターネットにおけるサイバーアクティビズムなどを例にとって、海外就労が自国に及ぼす成果をソーシャル・レミタンスという観点から検討した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

①Ueno Kayoko, "Love Gain: Transformation of Intimacy among Foreign Domestic Workers in Singapore," *Sojourn: Journal of Social Issues in Asia*, Vol.28, No.1, March, 2013, pp36-63.査読有
②Ueno Kayoko, "Life Strategies of Migrant Domestic Workers in Singapore," *Gender Perspectives,* Vol.3, No.3, 2012, pp5-8. 20 査読無
③ Asato Wako, "Nurses from Abroad and the Formation of a Dual Labor Market in Japan", *Southeast Asian Studies*, March, 2012, pp.642-669.査読有
④Belanger Daniele, Ueno Kayoko, Khuat Thu Hong, Ochiai Emiko "From Foreign Trainees to Unauthorized Workers: Vietnamese Migrant Workers in Japan," *Asian And Pacific Migration, Journal*, Vol.20, No.1, 2011, pp.31-53. 査読有
⑤落合恵美子「個人化と家族主義―東アジアとヨーロッパ、そして日本」ウルリッヒ・ベック・鈴木宗徳・伊藤美登里編『リスク化する日本社会―ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店, 103-125, 2011. 査読無
⑥ Ochiai Emiko, "Love and Life in Southwestern Japan : the Story of a One-Hundred-Year-Old Lady," *Journal of Comparative Family Studies*, 42-3 :399-409, 2011.査読有
⑦Ueno Kayoko, "Identity Management among Indonesian and Filipina Migrant Domestic Workers in Singapore?" *International Journal of Japanese Sociology*, Vol. 19, 2010, pp.82-97.査読有
⑧Ueno Kayoko, "Strategies of Resistance: Migrant Domestic Workers in Singapore, "*Asian and Pacific Migration Journal*, Vol. 18, No. 4, 2010, pp. 497-517. 査読有
⑨ Ochiai Emiko, "Feminization of immigration in Japan: marital and job opportunities," (co-authorship with Kao-Lee Liaw and Yoshitaka Ishikawa) in Yang Wen-Shan and Melody Lu eds., *Asian Cross-border Marriage Migration,* Amsterdam: Amsterdam University, 2010, pp. 49-86. 査読無
⑩ 安里和晃 「看護・介護部門における人材育成型受け入れの問題点　経済連携協定の事例から、『保健医療社会学論集』Vol.21, No.2, 2010, pp.35-54.査読有

〔学会発表〕（計 3 件）

① Ueno Kayoko, Analysis on Facebook movement among foreign domestic workers, Nov. 29, 2012, *World Social Form on Migration*, Miriam College (Philippines).
②Ueno Kayoko, Research Report on Filipina Ex Migrant Domestic Workers who Worked in Singapore, Hong Kong, and Taiwan, Nov. 29, 2012, *World Social Form on Migration*, Miriam College
(Philippines).
③山根真理・洪上旭・朴京淑・李東輝・長坂格・中筋由紀子「20 世紀アジアの社会変動と高齢者のライフコース―５地域質問紙調査結果から－」2012.11.4、日本社会学会、札幌学院大学（北海道）

〔図書〕（計 8 件）

①安里和晃、上野加代子ほか『親密性の労働をめぐる商品化と人の国際移動』（安里和晃編）、京都大学出版会、2013 年刊行予定、査読無
②Ochiai Emiko, Ueno Kayoko et al. Asian

Women and Intimate Work (Ochiai Emiko and Aoyama Kaoru eds.)Brill, 2013 年刊行予定、査読無
③落合恵美子、安里和晃ほか『変容する親密圏／公共圏 1　親密圏と公共圏の再編成アジア近代からの問い』(落合恵美子編)、京都大学出版会、2013 年刊行予定、査読無
④落合恵美子、上野加代子ほか『アジア女性と親密性の労働』(落合恵美子、赤枝香奈子編)、京都大学出版会、1-329 頁、2012、査読無
⑤上野加代子『国境を越えるアジアの著書家事労働者－女性たちの生活戦略』、世界思想社、総 258 頁、2011、 査読無
⑥落合 恵美子、上野 加代子、山根真理ほか『21ST CENTURY ASIAN FAMILY (タイ語)』、チュラーロンコーン大学出版会、1-289 頁、2011、 査読無
⑦安里和晃、落合 恵美子ほか『労働鎖国ニッポンの崩壊』(安里和晃編)、ダイヤモンド社、1-351 頁、2011、査読無
⑧落合恵美子、山根真理、上野 加代子ほか『平洲社会的家庭和　性　系』
世界知出版会、1-340 頁、2011 年、査読無

〔その他〕
①ホームページ
http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/socio-ueno/

②メディア報道
Improve maids' work conditions, experts urge" *The Straits Times*, Wednesday, Nov 21, 2012.
http://www.asiaone.com/News/Latest%2BNews/Singapore/Story/A1Story20121119-384386.htm

６．研究組織
(1)研究代表者
上野　加代子 (UENO KAYOKO)
徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授
研究者番号：５０２１３３７７

(2)研究分担者
落合　恵美子 (OCHIAI EMIKO)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：９０１９４５７１

礒田　朋子 (ISODA TOMOKO)
広島文化学園大学・社会情報学部・教授
研究者番号：９０１９３３９１

山根　真理 (YAMANE MARI)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：２０２４２８９４

安里　和晃 (ASATO WAKO)
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：００４６５９５７